

防災教育を中心とした実践的安全教育取り組みについて

－ 実践的な防災訓練の実施 －

長野市立西部中学校

1 はじめに

西部中学校は、長野市西部市街地から小田切・芋井地区を中心にした飯綱の山間地までと広い学区をもつ学校である。学校の立地は、住宅密集地にあるが、学区が広いため、スクールバスを利用して登校する生徒もいる。また、長野市西部地区の避難場所として指定を受けており、大災害の発生時には地域住民が避難場所として利用すると同時に救護所としての役割を担っていて、地域の方とのつながりや連携が必要不可欠とされている。学校防災アドバイザー派遣・活用事業5年目となり、緊急地震速報受信システム導入しての避難訓練も2年目となり、より実践的で理にかなった防災訓練を模索していく年である。

2 西部中学校の防災体制について

学校の規模は、通常の学級が6クラス、あさひ(知障)、りんどう(自情)、かたくり(難聴)の特別支援学級の9クラスで生徒数166名、職員24名と年々生徒数が減ってきている。

平成21年に竣工したりんどう体育館は救護所として、傷病者が参集することを想定して建てられ、多目的トイレ、シャワー室、エレベーターが設置され、救護所としての役割も担っている。

校内では、例年想定を変えながら年3回の避難訓練を実施している。緊急地震速報受信システムは、一昨年度設置し、昨年度初めてこれを使っての避難訓練を実施した。また、近隣の方々にも訓練に参加して頂けるようお願いしている。

3 避難訓練の実際

第1回避難訓練	4月12日(金)	第4校時	地震から火災	授業中
第2回避難訓練と防災講話	9月2日(月)	第3, 4校時	地震から火災	授業中
第3回避難訓練	2月19日(水)	第2校時から第3校時の休み時間	地震	1次避難のみ(予定)



<放送機器が使えないという想定からハンドマイクにて避難指示>

<保育園児を列の間に入れて避難>

(1) 第2回避難訓練実施後の職員の反省(課題や改善策を中心に抜粋)

① 生徒の避難について

- 防火扉が閉まっていたため、通るときに足を引っかける生徒が数名いた。(扉を閉めておくのも大事な訓練だと思った。) 前後の人が気遣っている姿も見られた。

- ハンドマイクの声は教室にいるとほとんど聞こえなかった。

- 避難の際ハンカチをしていない人が多かったのが気になります。

② 職員の避難誘導について

- 2次避難の指示について、南校舎(保健室)は指示を聞き取ることができなかった。(指示があったかどうか分からない)放送機器が使用できなきないときの指示系統方法をもっと検討する必要がある。

- 放送機器故障の設定で、計画通り実行できていたと思うが、いつもより時間がかかっている。火の回りを考えたときは、もう少しすばやい指示伝達を検討した方が良い。

③ 係活動について

- さまざまな場面を想定して、係活動のシュミュレーションもきちんと時間をかけて行った方が良いと思う。そういう回があってもよいのではないか。

- 消火栓からホースを出しての放水も一度やった方がよいと思います。

④ 防災アドバイザー(信州大学教育学部 榊原保志名誉教授)の指導

- 巡視したときに火災を発見したら「火事だー。」と大声で叫びながら、本部に報告するようにする。

- 非常階段を使うか、非常扉を使うかの判断は、日頃より校長判断で優先順位を決めておき教科担任が判断する。

- 防火扉の避難口にここを通る旨の指示カードが貼ってあるところは1カ所しかないが、すべての防火扉に貼っておいてもいい。

⑤ まとめ

今年度の第2回避難訓練では、放送機器が使えないという想定で、避難指示をハンドマイクで行った。反省にもある通り聞こえない場所があったということ、避難指示伝達

に時間がかかってしまったということが今後の課題として残った。災害時放送機器が使えない状況は起こりうることを全職員が理解して、ハンドマイクでの避難指示とともに巡視職員が直接口頭で連絡するのが確実であることが今回の避難訓練により確認できた。

(2) 防災アドバイザー（信州大学教育学部 榊原保志名誉教授）の防災講話

① 講話の実際

クロスロードとは、阪神・淡路大震災で災害対応にあたった神戸市職員へのインタビューをもとに作成されたカードゲーム形式の防災教材。二択クイズ形式で生徒は赤 と青のカードを持ち、どちらかの色のカードをあげ意見交換を行う。

問題1 あなたは食糧担当の職員です。

被災から数時間。避難所に3000人が非難しているとの確かな情報が得られた。現時点で確保できた食糧は2000食。以降の見通しは今のところなし。まず、2000食を配る？

YES (青) or NO (赤)

問題2 あなたは川沿いの集落の住民です。

母(65歳)、妻、子ども2人の4人家族。激しい雨が降り続けている。今洪水の危険があるとして集落に避難勧告が出たことを防災無線で知った。しかし、現在深夜12時。今すぐ非難を始める。

YES () すぐに非難する。

NO (赤) しばらく様子を見る。

実際に、上のような問題が出題され、生徒がその都度色のカードを上げた。パネリストとして3年生の生徒5名がステージにのぼり回答した。そしてどうしてその選択をしたのか一人一人が答えていった。その後榊原先生が、解説を加えた。



＜全校生徒がどちらかのカードを上げる＞



＜ステージに上ったパネリストの生徒＞

② 防災講話の生徒の感想

- もし、災害に巻き込まれた時の自分の正しい判断が自分の命を守ることにつながると思った。事前に避難する場所や危険な場所、非難ルートなどを確認する必要があると感じた。
- 過去の事例から学べるものがたくさんあった。クロスロードでも一人一人考え方が違ったりしていてどうやって考えてそう判断したかを聞けて良かった。
- クイズ形式だったので、じっくり考えて答えることができたけど本当にあったときには、たぶん慌てていて戸惑ってしまうかもしれないので、今回のことを思い出して対応したいと思いました。
- 事前に災害が起きたときを想定して準備をしておきたいと思った。懐中電灯や非

常食だけでなく、避難場所の確認やルートを家族で確認しておきたい。

- 災害が実際に起こる前に準備をしておくことの大切さが改めて分かりました。停電したとき、何が必要か何が使えなくなってしまうのか。そのために何をしておけば良いのかが具体的に分かったので良かった。また、クロスロードでは実際に災害が起きたときどうすればいいのかを理由とともに考えられたので良かったです。他の人の意見を聞くと納得させられるところもあって、面白かったです。
- 災害はいつ起こるか分からないので、日頃からの準備が大切だと改めて感じた。家族と避難経路などの確認をしたい。クロスロードゲームをやって、普段の準備も大切だが、その場その場での対応力や決断力が生死を分けることもあるなと思った。自分が決断する立場になったとき最良の判断ができるよう冷静に対処したい。

4 事業の成果及び今後の課題

(1) 成果

- ・生徒が、判断して自ら行動することの大切さを感じうる「クロスロード」を体験でき、ジレンマを生じる事象に柔軟に対応することが大切であると感じることができた。
- ・もし放送機器が使えなくなったらという条件下での避難訓練を実施し、ハンドマイクでは伝わらない所があるということが確認できた。更にいろいろな想定の下スムーズな避難、誘導の訓練を行っていききたい。
- ・より実践的な訓練となるよう、防火扉を閉め、防火シャッターをおろした中での訓練を行った。普段の校舎内とは違い、閉塞感があり、小さい避難口をくぐって避難することを体験させることができた。
- ・保育園児の避難誘導では、昨年度は園児が生徒より先に避難整列していたため、生徒の関わりがあまり持てなかったが、今年度は生徒が避難した後3年生の1クラスが待避場所から整列場所に一人一人を誘導して自分たちの列の間に避難整列させることで、生徒に園児や地域の方とともに避難するという意識を持たせることができた。
- ・地域の代表者の方々に訓練に参加して頂き、避難所、救護所の開設の仕方をお知らせするとともに、緊急物資の確認や発電機の操作訓練を行うことができた。

(2) 今後の課題

- ・今回は、放送機器が使えないという設定でハンドマイクを使っでの避難指示であったが、聞こえない場所が多く、やはり口頭にて大声で指示を出すことが必要である事が分かった。ハンドマイクや肉声で、なるべく速く指示伝達ができるよう職員訓練をしていく。
- ・傷病者がいる場合や校舎に取り残された生徒がいる場合の避難訓練を行っていく。
- ・地域の方だけでなく、小学校とも連携した防災訓練や引き渡し訓練を実施する。

5 まとめ

- ・今回初めて、非常扉を使っでの避難誘導、放送機器が使えないという想定での避難訓練ができたことは意義があったと思う。いろいろな状況の避難訓練を定期的に行うことが大切である。

(文責 安全・防災教育担当教諭 窪田 清幸)

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について

ー児童が自ら考え行動できる能力を養うための取組ー

長野市立加茂小学校

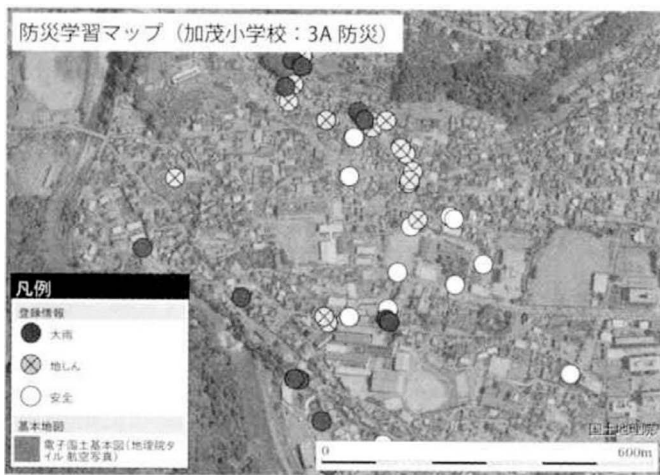
1 はじめに

長野市立加茂小学校は、県都長野市の西部に位置し、善光寺の近くにある。学区は、幼稚園から大学まで、多くの学校がある長野市の文教地区となっている。また、茂菅や小田切のような山間地もあり、変化に富んだ広い学区を持っていて、230名の児童が通ってきている。

2 本校の防災教育について

長野市の土砂災害ハザードマップを見ると、本小学校区の多くが土砂災害警戒区域または地滑り危険箇所に入っている。有事の際には、身の安全に気を付けなければならない地域で生活している。そこで、本校では、土砂災害ハザードマップにそれぞれの児童の家の位置を記した所在地マップを作成している。

また、現在の学校防災アドバイザーの指導の下、平成28年度、信州大学と特定非営利活動法人 Dochubu が開発した防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくりの実践を行った。このソフトウェアは、タブレット端末と Web-GIS を連携させることで、防災情報収集を効率化し、限られた時間の中で児童が防災についての思考・判断をより深められ、かつ学年に応じた取組をサポートでき、協働的に防災マップを作成していけるものである。



3 学校防災アドバイザーの関わり

- (1) ソフトウェアの更新と本年度方針打ち合わせ（メールにて）：4月～8月
- (2) 本年度授業方針打ち合わせ（本校にて）：8月2日 16:00～17:15
 - ① 参加者：信州大学教育学部廣内大助教授、Duchubu 落合様

- ② 内 容：今年度の学習に関する打ち合わせ。ICT 機器の事前準備を行うとともに、改めて防災学習のねらいについてご指導を受け、共通理解を図った。
- (3) ソフトウェアの動作確認と授業訪問（フィールドワーク）：10月10日8:00～10:30
- ① 参加者：Duchubu 落合様 信州大学教育学部学生5名 地域ボランティア3名
- ② 内 容：タブレット端末が正常に動作しているかの確認と、子どもたちの活用の様子を観察。学生チューター、地域ボランティアへの助言。フィールドワーク中の安全確認にご協力いただいた。
- (4) 授業訪問（フィールドワーク）：10月17日8:00～10:30
- ① 参加者：信州大学教育学部廣内大助教授、同学部学生2名 教育委員会職員数名
- ② 内 容：班に分かれてフィールドワークを行うため、道中の交通安全面およびソフトウェアの操作等、児童の活動について円滑に行えるようにしていただいた。
- (5) ソフトウェアについて：Dochubu 落合様
- ・フィールドワークで行ったデータが見えなくなるなど、不測の事態が起きるたびに電話やメールで、解決のために複数回のアドバイスをいただいた。
- (6) 今年度の実践について：信州大学教育学部廣内大助教授
- ・今年度の実践を進めるにあたって、児童が自ら考え行動できる能力を養う取組について、メールにて複数回のアドバイスをいただいた。

4 活動状況

(1) 活動のテーマ・参加者

日ごろよく行く場所で発災した際の避難所までの避難経路を考える。3学年児童43名。

(2) 活動のきっかけと目的

子どもたちが、日ごろの避難訓練の様子を想起しながら、自宅で被災したとき、周囲の状況がどのようになるかを考え、学校外での被災においても避難する必要があることを感じた。その際、日ごろよく行く場所を具体的に想定し、「そこから避難場所である小学校までどのルートをとることが安全な避難に繋がるのか考えたい」という思いが高まった。

そこで、いざというとき、よく出かける地域の場所（友達の家・公園など）から安全に避難することが本当にできるのか、各々の場所から学校までのルートが本当に安全なのかどうかを考えたり確かめたりすることを通して、一人一人が防災や安全への意識を高め、主体的に防災や安全について取り組む。

(3) 活動内容

①9月12日

学校外で大地震になった時には、学校など公共施設が避難所となることを確認した。



安全なルートの規準について考える

②10月10日、17日

野外活動で、大地震になったときに危険と感じた情報をタブレット端末に記録し収集した。

③10月11日、18日

各班の調査データが統合された防災マップを見ながら考察した。

④10月下旬

各班の調査データが統合された防災マップを見ながら、適切な避難ルートはどこなのかや、何に注意すべきなのかなどについて考える。また、一人一人自宅から避難場所まで避難する際の具体的な行動について作文にまとめた。



フィールドワークの様子

(4) 防災マップの様子



5 事業の成果及び今後の課題 (○・・・成果、●・・・課題)

- ICT（タブレット端末）と GIS（地理情報システム）を活用した防災学習の取組を実施することができた。
- 日常的に目にしてきた裏山や通学路などを防災の視点で見ることができた。
- 班での活動を全体に紹介する必要があるので、伝える力が向上した。
- タブレット端末を使った学習であったので、ICT 活用の力が向上した。
- タブレット端末にコメントを入力するので、習いたてのローマ字を習得する力やタイピングする力が向上した。
- 野外活動で自ら見て回り、実際に安全に避難できるのか考え合ったことで、自分たちの住む地区の安全について考えを深めることができた。

○今年度は、学生チューターのほか、地域ボランティアの方にもフィールドワークの支援をしていただくことができた。学校の学習に興味を持っていただき、来年度も協力をいただけることになった。

●学習成果を地域へ発信してほしいという要望も受けた。今後、地域と連携した活動の充実を図っていきたい。

6 本事業に関連した取組の発信（スタート時からの取組）

- (1) 日本教育工学協会：第 42 回 全日本教育工学研究協議会 全国大会にて発表
平成 28 年 10 月 15 日
 - ・参加者：藤井善章教頭、野池徹哉教諭、小松賢吾教諭
 - ・内 容：タブレット端末による GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアの開発
- (2) 廣内大助教授講義の長野市教職員研修講座「大震災から学ぶ学校の防災管理、防災教育」の中で実践発表
平成 29 年 7 月 14 日
 - ・発表者：藤井善章教頭
 - ・内 容：見つめ直そう私たち加茂地区の安全
- (3) 日本教育工学協会：「教育の情報化」実践セミナー 2017 in 飯田にて発表
平成 29 年 8 月 26 日
 - ・参加者：藤井善章教頭
 - ・内 容：GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくり
- (4) 日本教育工学会：第 33 回全国大会にて発表 平成 29 年 9 月 16 日
 - ・参加者：藤井善章教頭
 - ・内 容：小学生の防災マップ制作を支援するアクティブラーニング・ツールの実践検証
- (5) 日本教育工学協会：ニュースレターNo. 121 (2017 vol. 3)に掲載
平成 29 年 11 月 1 日発行
 - ・内 容：GIS を用いた防災学習支援用ソフトウェアを活用した防災マップづくり
- (6) 長野市教育センター研修講座にて実践発表
平成 30 年 7 月 6 日（金）
 - ・発表者：武田昌之教諭
 - ・内 容：見つめ直そう私たちの加茂地区の安全
- (7) 日本教育工学会：第 34 回全国大会にて発表 平成 30 年 9 月 30 日
 - ・参加者：藤井善章教頭 小松賢吾教諭 武田昌之教諭 他 4 名
 - ・内 容：小学生児童による通学路の危険度判定を支援するアクティブラーニング・ツールを用いた防災授業実践
- (8) HP 上にて実践の様子紹介（予定）
令和 2 年 2 月

（文責 教諭 武田昌之）

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業の取組について

— 地域と共に総合防災訓練 —

長野市立信里小学校

1 はじめに

信里小学校は、長野市の南に位置する茶臼山の山腹に位置し、児童数36名の山間小規模校である。東には眼下に長野市街地が広がり、北にはアルプスの峰々が一望できる自然豊かな環境にある。農業が盛んで、りんごや野菜の栽培の他に、400を超える溜池を水源に稲作も広く行われている。茶臼山はかつて大規模な地滑りが発生したことで知られ、現在でも地滑り防止のための維持管理が続けられ、地滑りの跡地は恐竜公園や茶臼山動物園として利活用されている。地域の災害特性としては、土砂災害が挙げられるが、耕作放棄地の増加に伴って使われなくなった溜池も潜在的な危険である。大雨の時には側溝から水が溢れ出たり、強風や落雷の時に身を隠す場所が少なかったり等、傾斜地特有の気象災害への備えも必要である。

2 防災教育の取り組み

本校は、本支援事業の指定を受け6年目となる。学校防災アドバイザーの先生方にご指導をいただき、自ら考え行動できる子どもの育成と地域と連携した防災活動をめざして、下記のような実践を行ってきた。

(1) 地域と連携して行う避難の充実

【避難訓練】

- ①教室からの基本の避難経路を確認するための火災を想定した避難訓練
- ②休み時間の火災を想定した避難訓練（第一次集合場所 → 校庭への避難）
- ③信里子どもプラザとの合同避難訓練（特別教室からの避難の仕方を確認）
- ④授業中の地震を想定した避難訓練（緊急地震速報受信システムの利用）
- ⑤煙の中の避難訓練（長野市篠ノ井消防署の支援）

【防犯教室】

- ①不審者対応（長野南警察署生活安全課職員と信里駐在所警察官による登下校時の不審者遭遇対応訓練）
- ②児童引き渡し訓練（犯罪者の地域徘徊を想定。保護者への緊急メール配信及び児童引き渡し訓練）

(2) 地域住民参加の「総合防災訓練」

■信里地区長会（防災会）と共催

- ①地震を想定した避難訓練、煙の中の避難訓練（保護者や地域住民も参加）
- ②自分の命を守るための防災プログラム（日本赤十字社長野県支部防災アドバイザー）
- ③地域学習「自分の住む地区内の危険箇所と防災資源を知る」
- ④自分の住む地区内での避難場所（第一次避難場所）を知る。

(3) 岡崎市立常盤東小学校との防災授業交流（6年）

- ・ 本校6年：「台風19号千曲川氾濫被害」について学習し、スライドショーで災害の様子を伝える。
- ・ 常盤東小学校6年：『「土砂災害マイ・タイムライン」をつくってみよう』を本校6年生が体験し、その感想を伝え合う。

(4) 信里小学校防災教育計画の見返し

- ・ 5カ年を1サイクルとした防災学習計画の見直し、更新する。

3 防災教育の実践（事例）

◆総合防災訓練 9月7日(土) 土曜参観日

- ・ 1校時：避難訓練／煙洞避難訓練（児童、保護者、地域住民）
- ・ 2校時：自分の命を守るための防災プログラム（児童、保護者、地域住民）
- ・ 3・4校時：防災マップを確認しながら、地区内の災害発生危険箇所確認と地区第一次避難場所確認

【ねらい】

- ◇学校と地域が一体となって避難訓練を行い、避難の仕方を身に付ける。
- ◇防災プログラムを体験することを通して、地震時の対応力と判断力を高める。
- ◇災害発生危険場所や第一次避難場所を確認することで自宅にいる時の防災意識を高める。

【参加者／連携組織 等】

児童・職員、保護者、地区消防団、学校運営委員、地域委員(区長等)、民生委員、学校ボランティア、地域住民、市教委指導主事

(1) 避難訓練／煙の中の避難訓練

参観日に学年教室に集まった保護者や地域住民が、児童と共に緊急地震速報受信システムの音声を聞き、安全な避難訓練を体験する。また、特別教室にスモークマシンから煙を発生させ、身を屈めながら出口まで歩行する避難体験をする。



【活動（確認）】

- ①緊急地震速報受信システム作動、緊急連絡放送、机下へ潜り安全確保（地震速報の聞き方、机下への入り方、頭を守りしやがむ）
- ②避難指示放送を聞き、安全に避難する（落下物の有無の確認、状況に応じた避難経路や出口の把握、非常階段の下り方、「お・は・し・も」の確認）
- ③スモークマシンを使った煙の中の避難（煙の中の避難の仕方、ハンカチの使い方）
- ④消防士より、避難の仕方について指導を受ける

〔児童や保護者、地域の方の感想〕

- ・地しんの時は、すぐににげないで、頭をまもれるように机の下にすぐ入るようにする。
- ・地しんの放送をよく聞いたり、先生の話の聞いたりして、落ち着いて行動する。火事になっていなければ、あわててひなんしなくてもいい。
- ・ものがたおれてきたり、本箱から本がとびだしてくるから、高いところにもものをおかないようにする。
- ・けむりの中をにげることがあるので、毎日ハンカチを持っているようにしたい。
- ・けむりのなかをにげるのは、こわかった。
- ・けむりの中のひなんは、練習だからできたけど、一人でけむりの中にいたらにげることができないと思った。
- ・地しんがおこったら火を消して、火事にならないようにすることが大事。
- ・学校の避難訓練で、しっかりと基本の避難方法を教えていただいてありがたい。
- ・両親が出かけていた時に大きな地震が起きて家にすぐ帰れない時はどこに避難するかなどをきちんと確認しておきたい。
- ・家では避難訓練をしたことがない。冬場のストーブを使う前に「ストーブが倒れたらどうするか」や「台所から火が出た時はどうするか」などについて子どもと話し合いたい。
- ・地区で防災訓練をする機会は少ない。今回のように学校と協力して防災訓練に参加するように区長から住民に勧めていく。

（２）自分の命を守るための防災プログラム

地震発生時の教室の様子をイラスト形式で示された教材を活用しながら、地震が発生した際にはどのように自分の安全を確保するかを考える。

〔指導者〕

- ・小柳 由佳 組織防災アドバイザー（日本赤十字社長野県支部）

〔活動（留意したこと）〕

- ①子どもは同じ学齢の仲間とのグループで、危険を察知した考えを出し合う。（１～３年生のグループには担任が入るが、子どもの自由な発言を肯定する）
- ②大人だけのグループをつくり、考えを出し合う。（保護者や地域の皆様、学校職員が交わって話せるグループ編制）
- ③進行役の防災アドバイザーが、「どうして、この子は危ないの」とグループごとに問いかけながら、危険に対する感度が高めた。（複数の考えを統合したり、分類したりすることで、自分の命を守る行為の仕方の醸成を図った）
- ④地震が起きた後のイラストを見ながら、自分たちが発見した危険を確認し合った。



【児童や保護者、地域の方の感想】

- ・じしんのときは、え（イラスト）のこどもみたいにないでいないで、すぐつくえのしたにもぐる。
- ・絵（イラスト）を見ていると、地しんの時の行動でよくないものが見つけれられたけど、実際に地しんがおきたら、わたしもすぐに机の下にかくれることはできないかも知れない。
- ・地しんがおこったら絵（イラスト）のように本箱や棚が倒れて頭をぶつけるから、本箱や棚からはなれた場所にひなんする。
- ・急な地しんだったら、放送はならないときもあるし、休み時間だったら先生もいないかもしれないから、自分でどうすればよいかを考えないといけない。
- ・急な地しんにそなえて、ひなんくんれんをやっておけば、いざという時に対応できると思う。
- ・地震発生時の対応の仕方を客観的にわかるイラストであるため、身の守り方について判断できる教材であった。
- ・大人が避難の仕方を教えることも大切であるが、イラストから避難方法を自分で考えたり、友だちと話したりしながら、ゲーム感覚でやれたのでよかった。
- ・大人同士のグループでは、意見が違ったりする場面があり、他の人の考えも聞けて参考になった。

（３）地域学習「地域の危険箇所と防災資源を知る」

自分の住む地域で安全面で気を付ける場所や災害時の避難の仕方について考えるため、地域の方と一緒に自分の地区を歩き、危険箇所や水資源、過去の災害等について知る。

【指導者】

各地区の区長および学習ボランティア

【調査内容（遊谷地区の例）】

- ①地区公民館に集まり、区長さんから土砂災害ハザードマップ（長野市発行）を見ながら地域に起こる自然災害の特色を知る。
- ②災害時の第一次避難場所は、地区公民館であることを知り、公民館に避難する際に自分ができることを考える。
- ③地区内の危険箇所や改善された危険箇所、水資源（井戸・ため池・沢）を区長さんの案内で現地視察をし、場所を確認する。



[児童や保護者、地域の方の感想]

- ・ ぼくの住んでいる遊谷地区は、地すべりがおこる印がついていた。はじめて知ったので、びっくりした。
- ・ 大雨がふったら、地すべりがおこるかも知れないので、大人の人に聞いたり、防災むせんのお知らせを聞いたりして、早めに安全なひなん所に逃げたい。
- ・ ひなん所に逃げる時は、ぼくの家族だけで行かないで、家の近くのお年寄りもいっしょににげるようにしたい。
- ・ ひなんじょでは、おおごえをだしたり、わがまをいったりしてはだめ。
- ・ 地すべりがおきた時は、電信柱もおれていて電になるかも知れないから、かいちゅう電灯を用意しておきたい。
- ・ ひなん所では、大人の人と一緒に食べ物をくばったり、そうじをしたりする。
- ・ 地しんの時は、石垣や家のへいの近くにいと危ない。
- ・ 地区内には昔使われていた井戸がいくつもある。水道が使えない時は井戸の水を使えばいいけど、飲んで安全なのか心配だ。
- ・ ため池があるので、池のそばで遊んだり、ふざけて池に入ったりしてはいけない。
- ・ 一人で遊んでいて、ため池に落ちると誰も助けてくれないから、ため池の近くでは遊ばない。
- ・ 道路が寸断されたとき、古道を知っているといいことや、その整備が必要だと思う。
- ・ 学校以外にいるときや子どもだけのときの避難の仕方を家族で確認したい。地区公民館以外の避難場所が小学校であることがわかってよかった。

4 学校防災アドバイザーや地域防災支援機関との関わり

(1) 9月7日(土)

- 長野篠ノ井消防署 職員(2名)
- 小柳 由佳 組織防災アドバイザー(日本赤十字社長野県支部)
- 篠ノ井第五分団長
 - ・ 地震を想定した地域共催避難訓練
 - ・ 煙洞を使った煙に巻かれた状況での避難訓練
 - ・ 自分の命を守るための防災教育プログラム

(2) 10月10日(木)

- 特定非営利活動法人 Do Chubu 落合 鋭充 氏
 - ・ 岡崎市常盤東小学校との交流について

(3) 12月6日(金)

- 信里地区防災会(学校運営委員/地区長/民生児童委員)
- 篠ノ井第五分団長
 - ・ 学校が避難所になった際の対応について
 - ・ 台風19号被害に遭った地区の避難所開設について

(4) 12月5日(木)・12月23日(月)

- 岡崎市立常盤東小学校長 近藤 嗣郎 先生、6学年担任の先生
- 岡崎市教育委員会情報担当 熊谷氏
 - ・ TV会議システムの試験放送について

(5) 2月4日(火) 予定

- 常盤東小学校 近藤 嗣郎 校長先生、6 学年担任の先生
- ・常盤東小学校 6 学年児童とのTV会議システムを活用した防災学習

5 まとめ

- (1) 様々な想定で避難訓練を実施する中で、今年度は新たに休み時間を想定した避難訓練を行った。緊急放送で最寄りの避難集合場所(一次避難場所)に集まり、上級生の指揮で全体集合場所(二次避難場所)に集まる体験ができたこと、基本の避難経路以外に状況に応じた避難経路を判断して自分たちで避難する体験ができた。
- (2) 地域と共催の総合防災訓練は、地域防災への意識を高めた。
 - ①保護者や地域住民、消防団と共に緊張感のある避難訓練が行えた。避難訓練の経験が少ない保護者や地域住民が、地震を想定した避難訓練を体験したり、煙洞をつかった煙の中の避難を体験したりすることができた。
 - ②「自分の命を守るための防災教育プログラム」を児童や保護者、地域の方と一緒に受講した。児童が親しみをもてるイラスト形式にしてあるため、地震が発生した場面をイメージすることができた。またイラストから安全の視点で「気づく」「考える」「伝え合う」「合意する」などの姿が窺えた。同時に、大人も一緒に考えることで、家庭での災害に対する安全な環境についても考えるきっかけとなった。
 - ③自分の住む地区での防災地域学習では、区長さんをはじめ学習ボランティアなど地域の皆さんの協力で行うことができた。危険箇所点検に加え、水資源や災害時のう回路、危害獣の出没についても知ることができた。地域学習を積み重ねてきたことで、児童は自分の地区を知り、地区の人々とのつながりができてきている。このことが真の地域防災になってきていると考える。
- (3) 組織防災アドバイザーの皆様の支援を受けて、テレビ会議システムを活用した岡崎市立常盤東小学校との防災学習交流を計画している。本校からは、台風19号の被害状況を画像で報告したり、洪水ハザードマップと水害被災地との関係を説明したりする内容を検討している。両校で意見交換ができることを期待したい。

(文責 教頭 立野正之)

学校安全総合支援事業（３年目）の取り組みについて
— 地域連携をめざした学校防災アドバイザー派遣・活用 —

長野市立山王小学校

１ はじめに

本校は長野市の中心市街地に位置し、東は交通の要所である長野駅善光寺口周辺から、西は自然豊かな旭山までを学区とする変化に富んだ学区である。ビルに囲まれた学校であるが、すぐ西側を裾花川が流れ、校内には校章のデザインになっている白モクレンをはじめ、二百種以上の樹木や草花が生える自然豊かな学校である。大正１２年に長野尋常小学校山王部校として設立し、大正１５年に山王尋常小学校となり、昭和２２年より長野市立山王小学校となっている。かつては全校児童数が１９００名余の頃もあったが、現在は全校児童２４４名（令和２年１月現在）である。本校が市街地校であることや本校児童の在所在が、大きく安茂里地区と第５地区の２つの行政区からなっているため、地域連携を進めていく上での課題が見え隠れしている。本事業を活用することでよりよい連携のあり方を探りたいと考えている。

２ 長野市立山王小学校の防災体制について（概要）

年度当初に下表のように防災の組織を作り、年３回の避難訓練をおこなっている。

係	任 務
第１報	● 火災発見の第１報を事務室へ連絡（①非常ベル、②伝令、③校内電話） ● 連絡後消火係が来るまで初期消火 ● 消火係到着後は自分の任務へ
係（場所）	任 務
本部（校庭）	全体の統括、指示、指令、人員確認
通報・連絡係（事務室）	校内緊急放送を流す消防署等への通報初動指示
救護係（校庭）	病気・けがをした児童の避難誘導、手当
児童管理係（校庭）	避難した児童の人員確認、保護
搬出係（校長室）	重要物件の搬出管理
消火係（出火場所）	初期消火への対応、現場での指示
避難誘導係（各分担場所）	授業時の避難誘導○担任（学年主任）
	授業時間外の避難誘導北校舎 1F, 2F, 3F南校舎 1F, 2F, 3F体育館 校庭

3 緊急地震速報受信システム設置前の避難訓練について

非常時の組織としては整えられており、避難訓練も定期的におこなわれ、児童も職員の指示に従って整然と避難できている姿が見られる。しかし、災害が起きたときに本校の周りで何が起こる可能性があるのかという想定がなされておらず、校庭または体育館に避難をして全校児童が確認されれば終了という避難訓練になっている実情もある。災害時に起こり得る様々なことを想定しながら、二次避難の仕方・保護者との連絡の仕方等を、具体的に職員がイメージして対応を考えておくことが必要であると考えている。

4 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

(1) 緊急地震速報受信機設置に関わる取組

ア 教職員に対する説明、研修

「緊急地震速報発報端末 地震の見張り番 Touch」について、機能や操作方法について4月に研修した。

イ 児童・保護者に対する周知

どのようなシステムが導入されているのかについて、避難訓練の折に改めて児童へ教授した。保護者へは、学校だよりやPTAの会合の場において周知した。

(2) 緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練

シミュレーション訓練機能を活用し、中越地震のデータを用いて訓練をした。

5 学校防災アドバイザーの関わり

(1) 7月26日(金) 職員研修 信州大学教育学部 廣内 大助教授より

「過去の災害から学ぶ学校防災の取り組み」と題してご講演を頂き職員研修を行った。学校現場では、防災管理と防災教育の両方が必要であるということ、そのために地域のリスクまたは資源をよく知り、行動に結びつけて考え、訓練していくことが大切であることを学んだ。本校が今後取り組んでいきたいと考えている避難所運営に関しては、初動を過ぎたら地域の力を活かすこと、その



のために交流を通じて、よい関係を築くことが肝要である旨示唆頂いた。地震災害発生を念頭にした地域との連携のあり方について協議をはじめることにつながった。

(2) 8月28日(水) 避難訓練 連携のあり方に関する協議

信州大学学術研究・産学官連携推進機構 本間 喜子先生指導のもと廣内先生、行政の方や地域の方、NBS報道関係者、PTA会長にも参加頂きながら、緊急地震速報受信システムを利用した避難訓練の実施、防災ダック君による防災教室、その後には防災連携のあり方に関する協議を行った。



NBSアナウンサーや県の防災ダック君らによる防災教室の様子

防災連携についての協議①の様子

(2) 10月4日(金) 5年 理科流れる水のはたらきの公開授業、授業研究会

授業支援：千曲川河川事務所防災情報課 小林 卓生 様 平林 進 様

連携のあり方に関する協議： 信州大学 本間 喜子先生 指導



水害(川の氾濫)防止対策について学んでいる様子

防災連携についての協議②の様子

平成7年の県北部豪雨で増水した裾花川の写真を見たり、長野市や地域の水害対策を聞いたりして、防災について考え合った。児童は、「水位を観測する機械を登下校中に見るけど、いままで何なのか知らなかった。山王小の近くにたくさんの水害を防ぐ工夫があることが分かった」と語り、防災意識を高めた。なお本単元の実施にあたり、42ページに及ぶ副読本「流れる水のはたらき」(企画・制作・・・千曲川・犀川大規模氾濫に関する減災対策協議会)を作成頂くことができた。大変有り難かった。今後も教材として活用したい。(この1週間後台風19号による水害が発生。本授業を思い起こした児童も多かった)

6 事業の成果及び今後の課題

本事業を活用して、地震災害と風水害のそれぞれについて学習を深めることができた。また学校が「避難所」となった場合の運営や地域と連携した合同避難訓練の実施に向けて課題はあるが、協議の場を何回か持つことができ前進している。本事業が継続3年目ということで、保護者や地域の方の関心も高まってきた。

7 まとめ

本事業に参加できたため、本校の目指す防災教育の方向が見えてきたと感じる。次年度も今年度の成果をいかしながら防災組織づくりや避難方法の改善を検討したり、職員・児童の意識を高めたり、地域との連携を深めたりしていきたいと考えている。

(文責 教頭 柄澤 敏)